

## エリザベス・ビスランドとネリー・ブライの見た日本

—ラフカディオ・ハーンとの関係に触れながら—

梅本 順子

Junko UMEMOTO. Japan as Seen by Elizabeth Bisland and Nellie Bly: With References to Lafcadio Hearn. *Studies in International Relations* Vol.38, No.2. February 2018. pp.79-86.

A historical race to travel around the world was undertaken by two female journalists, The *New York World's* Nellie Bly and *Cosmopolitan's* Elizabeth Bisland in emulation of Jules Verne's hero, Phileas Fogg. Bly described her experience in a book titled *Around the World in Seventy-two Days*, 1890 and Bisland also wrote a book titled *Seven Stages: A Flying Trip around the World*, 1891. Bly sailing east across the Atlantic Ocean stopped in Japan in the last stage before going back to the United States. On the other hand, Bisland who headed west landed in Japan in the first stage of her trip. Both journalists wrote favorably about Japan though they only stopped briefly, Bly for 5 days and Bisland for only 2 days. Bisland's experience of this travel, short as it was, seems to have influenced her friend, Lafcadio Hearn's decision to visit Japan. With Bisland's introduction, Hearn came to know Mitchell MacDonald, paymaster of the U.S. Navy in Yokohama, who became a close friend and helped his family after his death.

### はじめに

昨年、NHKの「歴史ヒストリア」という番組では、二回に渡り、ネリー・ブライ (Nellie Bly, 本名 Elizabeth Cochran, 1864-1922 これ以降ブライと呼ぶ) とエリザベス・ビスランド (Elizabeth Bisland, 1861-1929 これ以降ビスランドと呼ぶ) というどちらも20代のアメリカ人女性ジャーナリストが行った世界一周の早回り競争を取り上げていた。この競争はブライが勝者となったが、もう一人の挑戦者であるビスランドは、後にラフカディオ・ハーンの伝記と書簡をまとめて『ラフカディオ・ハーンの人生と書簡』(*The Life and Letters of Lafcadio Hearn*, 1906) を出版し、ハーンの遺族のみならず、後のハーン研究に大いに貢献することとなった。また、ハーンが日本に行ってしまったからも文通を続けた数少ない友人・知人の一人であった。ハーンの死後には遺族を訪問するなど、本論で後に言及することになるアメリカ海軍の主計官を務めたミッチェル・マクドナルド (Mitchell McDonald, 1853-1923) とともに、著作権の管理を含め、遺族のために尽力したことで知られる。

そのようなビスランドが世界一周旅行に出かけたのが、1889年11月のことであった。ハーンはその半年ほど前に、二年ほど滞在した仏領西インド諸島よりアメリカに帰国していたため、10月中ごろにはニューヨークに出てビスランドと再会を果たしていた。しかし、そののち彼女の世界一周の旅が急に決まり、あわただしく出立してしまったことから、ハーンはもし前もって彼女が世界旅行に出かけることを知っていたら、熱帯での生活を経験したものとして何らかのアドバイスができたのにと彼女宛の書簡で残念がっている<sup>(1)</sup>。ビスランドは翌年1月末にニューヨークに帰還したが、それから一か月余り後の3月上旬には、今度はハーンがアメリカを発って日本に向かってしまったのである。ただ、ハーンが横浜在住のマクドナルドと会うことができたのは、ビスランドがマクドナルドに宛てた紹介状のおかげだった。『増補新版文学アルバム小泉八雲』(恒文社, 2008) によればビスランドによる紹介状を携えてとあるので、帰国後のビスランドは日本出立を控えたハーンに会っていることになる。

本稿では、まず、ビスランドがなぜブライと世

界一周早回り（一人は東回り，もう一人は西回りで一周する）に挑戦することになったのかについて，ならびに彼女の旅はどのようなものであったか，ブライと比較しながら明らかにしたい。さらにビスランドもブライもそれぞれの体験を旅行記として出版していることから，ビスランドの *Seven Stages: A Flying Trip around the World* (1891) とブライの *Around the World in Seventy-two Days* (1890) をもとに，とりわけ日本について述べられた部分に着目して比較する。

### 世界早回り競争の背景

本題のビスランドとブライの世界一周早回り競争だが，もともとブライが日刊紙であるワールドに売り込んだ企画だった。ワールドの経営者は当時ジョセフ・ピュリッツァー (Joseph Pulitzer, 1847-1911) であったが，その編集方針はジョン・A・コカリル (John A. Cockerill, 1845-96) に任されていた。社内にもこのチャレンジについては反対があったのだが，コカリルが許可したことで，ブライは世界一周にチャレンジできたのだ<sup>(2)</sup>。

ちなみに，コカリルは若い時から編集畑を歩いてきており，シンシナティ，セントルイス，そしてニューヨークと新聞社一筋の人物だった。シンシナティのエンクワイアラー紙にいるころは，駆け出しのハーンを採用し，そのハーンを黒人の混血女性との同棲を理由に首にしたこともあった。だが，ハーンは，彼に対し悪感情はなかったようだ。その証拠として，1895年に，ニューヨーク・ヘラルド紙の日清戦争取材のための特派員として来日したコカリルと，ハーンは旧交を温めている<sup>(3)</sup>。そんなコカリルは，1889年当時，ニューヨークのワールド紙にいた。当時は販売部数を増やすために，体を張ってでも話題性のある企画を打ち出すことが重要だった。コカリルの下，シンシナティ時代のハーンが，記事のために教会の尖塔に上るなど，体を張った取材をしたのも，当時の新聞の傾向を反映している。新聞社こそ変わっても，今度の世界一周企画もその路線にあったといえるだろう。

ところが，月刊誌コスモポリタンがワールド紙

の企画を知り，対抗馬として自社の女性記者であるビスランドに白羽の矢を立てた。本来，フランスの作家ジュール・ヴェルヌ (Jule Verne, 1828-1905) の小説『80日間世界一周』(*Around the World in Eighty Days*, 1872) の架空の主人公フィリアス・フォグ (Philiass Fogg) が世界一周を成し遂げた80日間という数値を切ることができるかどうか，女性記者を使って実証することが狙いだった。しかし対抗馬がでてきたことから，所用時間を二人で競う展開になった。しかも，ブライが出立した後にニューヨークを立ったビスランドは，ブライとは反対周りで世界一周に挑戦することになったのである。

このあたりの事情については，マシュー・グッドマン (Matthew Goodman) の『ヴェルヌの八十日間世界一周に挑む—4万5千キロを競ったふたりの女性記者』(*Eighty Days: Nellie Bly and Elizabeth Bisland's History-making Race around the World*, 2013 これ以降『80日間』とする) に詳しい。グッドマンの著書はノンフィクションであり，前述の二人の女性ジャーナリストの旅行記，並びに彼女らを支援したワールド紙やコスモポリタン誌，その他の新聞や雑誌を多く引用することによって当時の世界一周競争を取り巻く背景を明らかにしたものである。特に，ビスランドが加わることになった経緯については，ワールドの女性記者が世界一周に挑むことを知ったコスモポリタンの編集者ジョン・ブリズベン・ウォーカー (John Brisben Walker<sup>(4)</sup>) がどう動いたかが述べられている。

グッドマンは使用していないが，ネリー・ブライの伝記をかいたニナ・ブラウン・ベーカー (Nina Brown Baker) は，コスモポリタン誌を所有していたウォーカーとワールド紙側のジュリアス・チェンバースとの掛け合いを次のように説明している。11月14日の朝食時にワールド紙を読んだウォーカーが即断でビスランドを世界一周の旅に出すことにした。その夜，ワールド紙のチェンバースのオフィスを訪ね，コスモポリタンの女性記者を反対周りで一周させることにより競争させれば，世界中の眼がそちらに向く歴史的レースになると強調した。しかも，対抗馬のビスランドがサンフランシスコ行きの列車に乗ったのを見送ってきたと

ころだと述べている。これに対し、チェンバースは、もしワールド紙でビスランドについて触れてほしければ、広告料を払って広告欄に掲載すればよいとそっけない<sup>(6)</sup>。

ワールド紙は、ブライが世界一周をどのくらいの時間で終わられるかを、一秒単位まで正確に新聞の読者に予想させ、見事当てた読者一人にはヨーロッパ・ツアーを景品として付与するという企画を作っていた。また、応募にはワールド紙の購入を義務付けており、日刊紙についている応募券を使用しただけのみ参加可能とした。また、応募券を使用する限り、一人何枚でも応募できるとしたこと、連日ワールド紙を購入する読者が激増したという。日刊紙にとっては、購読者を増やすまたとないチャンスであったことがわかる。日刊紙であるワールドの企画に、月刊誌のコスモポリタンが便乗して自誌の売り上げを伸ばそうとしているとして、はじめワールドの側の反応はよくなかったが、女性二人がそれぞれ東と西から反対周りで競うということで、それだけ読者の関心が高まるのではないかと期待が膨らんだ。ただし、先に出発したブライは、対抗馬の出現でその旅が競争になっていようとは、旅も終盤（香港）に近づくまで知らなかった。

ワールド紙以外にも女性二人によるレースは関心の的であったらしく、ニューヨーク・タイムズ紙の11月24日付の「一週間の話題」と題するコラムで、世界一周にチャレンジするビスランドのみが取り上げられている。先にも触れたようにコスモポリタン側としては、お金を出してまでワールド紙に頼むことはしないだろう。コスモポリタン側がニューヨーク・タイムズに掲載を依頼したかどうかは定かではないが、ニューヨーク・タイムズはビスランドが『80日間世界一周』の主人公であるフィリアス・フォグの記録を破るために世界一周の旅を始めたことを筆頭に、そのプロフィールとして、ニューオーリンズの名家の出身でたいへんな美人であること、さらに三年前よりニューヨークでジャーナリストとして活動してきたことなどの情報が述べられている。外見や物腰に似合わず、大胆にも一人でこの挑戦を始めたことには驚かされるが、友人の誰もが、忍耐と強い意志

により彼女の挑戦は無事になし遂げられると確信していると結んでいる<sup>(6)</sup>。

世界一周旅行の最短記録を目指す二人は、それぞれ同じようなルートをとることになった。しかし同じようなルートとはいえ、船や汽車への乗り継ぎの関係で各地での滞在時間はかなり異なるものとなっていた。とくに、もともとブライの発案でワールドが企画した背景には、先のニューヨーク・タイムズも指摘していたように、小説の主人公の旅程を実際に検証してみるということにあった。そこで、ブライは、敢えてこの弾丸旅行の間を縫って、フランスでは、作者のヴェルヌの自宅を表敬訪問している。まず大西洋を横断したブライは、サザンプトン、ロンドンと進み、欧州大陸に入るとヴェルヌ訪問に向かったのである。

『八十日間世界一周』のような作品が書かれたうえに、それを実証しようと、大型の旅客船、ならびに各地の交通手段を用いて競争する背景には、19世紀末の科学技術と産業の発展、そしてアジア各地での欧米の植民地の拡がりがあった。世界的に海上、並びに陸上の交通の便が整備され、国をまたいての行き来が楽になったこの時代ならではの風潮といえるだろう。南北戦争以降、アメリカでも海外旅行が盛んになっていた。その一例として、ヨーロッパ方面への旅行でツアーガイドを務めた体験をもとに、マーク・トウエインは『赤毛布旅行記』(Innocent Abroad, 1869)を著している。このように、娯楽としての海外旅行の定着が、二人が挑戦したような世界一周旅行を実現させたのであった。

## 女性記者二人の見た日本

さきに触れたグッドマンは、その著書で二人の女性がそれぞれ出版した旅行記、ならびに彼女らにまつわる記事や書籍をもとにその旅程を再現している。二人は逆回りであるにも関わらず、天気や故障等の不都合で航路が変更になる以外、ほぼ同じような場所に滞在し見聞している。そのためか、グッドマンは、ビスランドについては、彼女の旅行記(Seven Stages: A Flying Trip around the World)をもとに、太平洋横断後、最初の寄港地

である日本における体験を紹介しているが、ブライの方の日本体験は省かれている。グッドマンは、ブライの香港での体験を紹介したあと、日本を出立したあとの太平洋航路でのエピソードへと飛んでしまっているのである。ビスランドの日本滞在が二日であったのに対し、ブライは五日も滞在し、彼女なりに日本探訪を行っているにもかかわらず、その詳細については全く触れられていない。船の便の都合とはいえ、ブライは日本滞在を満喫しており、ビスランドの旅行記の抑えた感じとは対照的に、見聞した日本の諸相を綴り、またそれについて率直な感想を述べている。そのような二人の著した旅行記に従って、彼らの見た日本をみてゆきたい。

ブライは最後の寄港地として、ビスランドは最初の寄港地として日本の地を踏んだ。いずれも滞在は横浜グランドホテルだった。二人を比較するにあたって、共通して取り上げている項目は、人力車、ホテル、日本人の服装や行動などである。二人が宿泊した横浜グランドホテルは港に近く、西洋式のホテルと言ったら、このホテルくらいしかなかったのかもしれないが、ブライの言葉を借りると、ネズミさえいなければ、ニューヨークのホテルと比べても遜色ないという。特に日本人の使用人の「おもてなしぶり」を高く評価しているのである。こぎれいできびきび働く日本人に対してブライの評価は高く、もう一人のビスランドも同様に高い評価となっている。

ハーンとの関係から言うならば、ビスランドはハーンより一足先にこの旅先で、当時アメリカ海軍の主計官であったミッチェル・マクドナルドに出会っている。冒頭で触れたように1890年来日したハーンがマクドナルドと知り合ったのは、ビスランドの紹介による。マクドナルドは、ハーンの生前、日本において親しく交流し、その死後は遺族のために、財産管理にあたってくれた人物である。世界一周旅行中のビスランドが出会ったころのマクドナルドは、すでに日本滞在が二年に及んでいたことから日本の事情に通じており、下船してきた同胞の案内に努めてくれたのであろう。退役した後もマクドナルドは日本に滞在することを望み、横浜グランドホテルの社長になっている。

ビスランドは、最初に日本に降り立ったとき、日本を「楽しみの国、陶器の諸島」に加え、「敷島」と呼び、さらに「菊の国」と呼んだ。さらに東洋を「人類の発祥の地であり、複数の宗教、詩、陶器、建築物の誕生したところ」と定義した。これとは対照的に、故国アメリカは「常識と蒸気機関の耕作機と新聞の国」だと述べている<sup>(7)</sup>。さらに日本を「妖精の国」と呼んで、わずかに二日しかいられないことを惜しんでいる。まず日本列島に船が近づいてきたときに見える富士については、後にハーンも書いているが、乗客の誰もがその容姿に特別な感動をいだくのだった。ビスランドは「富士」の名前はアイヌ語で「火の山」を意味すると述べているが、当時流布していたアイヌ語説の影響を受けているのだろう<sup>(8)</sup>。

ビスランド同様、ブライも日本人に対する評価は高い。彼女にとって日本は「愛と美と詩のある清潔な国」<sup>(9)</sup>なのである。ブライの場合、中国人批判の裏返しですがすべて日本人賛美となってしまうという過激な発言が並ぶ。彼女の定義では、日本人は、清潔で、微笑んでいて、優雅であり、悪いところが少ないのに対し、中国人はその反対であるとまでいうのである。中国人批判の裏返しで、日本人賛美は高まってゆき、その行きつく先として、新婚旅行にはエデンの園である日本行きを夫に提案するという。仏陀の一生である『アジアの光』を書いたエドウィン・アーノルドの名前を挙げて、アーノルドのように日本に住もうとまでいうのである。このころハーンも読んでいた『アジアの光』は、アジアに赴く人々のバイブル的存在になっていたのかもしれない。

ブライの方に、富士山に関する描写や言及がないのは、横浜までの船上で大晦日のパーティを十分楽しみ、年を越してから床につき、周囲の景色を観察する間もなく目を覚ましたら日本に着いていたからであろう。彼女の横浜到着第一声は、薄汚い小舟と群衆で混雑していた香港を過ぎると、清潔な日曜の装いの横浜についたというものである。ブライの意見の背景には、大陸横断鉄道が完成すると、中国人労働者を必要としなくなり、次第に中国人移民の排斥が起り始めていたアメリカの事情があるのだろうか。極端な日本人賛美は

齒がゆくなる。また、その誇張された表現は、抑えた調子のビスランドのものとは対照的である。

具体的事例としては、日本の人力車夫に対する高評価がある。セイロンから香港までアジア各地で人力車を滞在中の足としてきたプライは、グリースのにおいや汚いひざ掛けなどのそれまで乗るたびに感じてきた不満が日本の人力車にはないことを強調した。ビスランドが旅の手始めに日本に立ち寄ったのとは異なり、欧州、アジアと旅をしてきて、帰国の直前、最後の外国の寄港地が日本であったことを考えると、プライの人力車に対する意見はあながち間違っていないかもしれない。日本の人力車については、ビスランドの評価も高く、安い料金にも関わらず、早く乗客を目的地に運ぼうと重労働に耐える日本人車夫の足をサラブレッドに例えている。同じころ、人力車で日本各地を回ったエリザ・シドモアの旅行記のタイトルが『日本人力車紀行』(*Jinrikisha Days in Japan*, 1887)となっていることから、旅行客の足となった人力車は、欧米人にとって注目すべきものであったことがわかる。それだけに高評価を得る日本人車夫は、日本の顔として欧米と日本の間での民間外交を担っていたのかもしれない。

次に、二人の女性が日本で行った買い物についてみてゆく。ビスランドは、日本到着の翌朝には買い物に出かけている。日本人の暮らしに触れ、ペリー来航前と変わらないという。変わらないというのは、文明の発展を願う日本にとっては、必ずしも褒め言葉とは限らないが、日本の歴史や文化に注目する外国人は、日本に変わってほしくないという気持ちがあるのかもしれない。世紀末の変遷の速い欧米とは対照的に、日本は癒しを感じさせてくれる場であったと想像される。また、商品を眺める客に買うことを無理強いしない日本人を称賛するのであった。貨幣価値がずいぶん違うことから、何でも安いと感じさせる日本での買い物だが、それ以上に買った絹物を一日で仕立ててくれるというところも、気に入ったようである。

既に触れたように、ビスランドが掲げた日本の美点が、詩、陶器、伝統、建物だとすると、詩も陶器も建物も伝統文化を受け継いでおり、開国以来の急速な近代化の波にのまれながらも、日本が

その価値を維持してきた分野に着目したといえるだろう。ビスランドの世界一周からの帰国後一か月余りで、ハーンは日本に向けて出立した。そのハーンも、ビスランドのように古い日本の有形無形の文物が保持されることを願ってやまなかったことを考えると、日本に対するビスランドとハーンの姿勢には共通点があったと感じさせられる。

一方のプライは、日本においては特に購入したものについて触れていない。それというのも、荷物を増やさないようにすることを優先していたからだ。しかし、彼女の購買意欲を刺激したエピソードがある。それは、猿だった。上野公園の動物園で見た猿は、自分に小石を投げつけた男を覚えていて、猿の檻を取り巻く郡衆の中に逃げ込んだ男めがけて餌の芋をぶつけるほど賢かった。これに感動したプライは、このような猿がほしかったと悔やんだ。というのも、立ち寄り先のシンガポールで購入した猿を、檻に入れて持ち運んでいたからだ。

五日間も滞在しただけにプライの日本での訪問先は、鎌倉の大仏から、芸者の踊りをみせる茶屋、当時の横浜の百段階段と呼ばれる界限など多岐にわたる。また、日本到着が正月ということもあって、街角の子供の遊びや庶民の正月の過ごし方など、興味を持って観察している。また、それらの庶民の姿を美しいと感じているのである。このように伝統文化や習慣を守る庶民の暮らしを観察する機会に恵まれた。

プライが鎌倉大仏を訪れたようにビスランドは芝の増上寺を訪れ、歴代の徳川将軍の墓に詣でている。二人の日本滞在期間の長さの違いとはいえ、二人の訪問地があまり重なっていないところに、関心の相違があるのかもしれない。また、プライの方は、日本人が気恥ずかしくなるくらい、日本人を誉めていることも気にかかった。彼女が着目したのは、日本人が短期間に欧米の文明を導入し発展したこと、それでいて伝統文化を維持し、優雅さを絶やさないでいることなどである。さらに、日本人の教育についてもその称賛は続いたのである。

これまで述べたような意見は、当時の来日外国人の好意的な評価をさほど逸脱するものではなかつ

たが、ブライらしさはむしろ次のような箇所に表れているといえるだろう。日本に住む同朋から聴いた話とことわって、死者の火葬に携わる老人の仕事を描写している。このような火葬見聞記は、それまで故国にあっては、体を張って精神病院などを取材してきたブライの姿を髣髴とさせる。ブライが、立ち寄り先の香港では、広東まで足を延ばし、処刑場や拷問器具、果ては生首まで見ていることを考慮するなら、この記述にしてもさほど驚くべきことでもないかもしれない。

もう一点、特記すべきは、ブライが世界早回り旅行中にヴェルヌを訪問したことについて、日本人の新聞記者から取材を受けたことである。いくつかの質問は、巻紙に間を空けて書いてあり、ブライが答えるごとにその間を埋めていくというやり方を取っていた。このやり方を馬鹿にしていたブライだが、後にアメリカに帰って質問攻めにあってみると、日本人のやり方のほうがずっと人間的だと感じたと言っている。彼女の記事は読売新聞の1890年1月5日、6日、そして8日付と、三回に渡って散見される。ニューヨークのワールド紙の女性通信員のネリー・ブライが、75日間で世界一周をする途上、3日に横浜に到着したことが中心にかかれており、最後の8日付では、7日に横浜港からオセアニック号で帰路についた旨が述べられている。

## おわりに

「アドベンチャー・トラベル・ライター」というサイトが、『80日間』を書いた著者のグッドマンに実施したインタビューがある<sup>(10)</sup>。その中に大変興味深いものがあるので紹介したい。グッドマンは、関心があったものの、その著書である『80日間』に取り入れることができなかった部分があるかと訪ねられたとき、それが「ラフカディオ・ハーン」についての内容であったと語っている。ハーンについての研究なくしてビスランドを語れないという。いろいろハーンについて調べたにもかかわらず、本著のストーリーとは関係がないものは、割愛せざるを得なかったと述べている。すなわち、グッドマンは、ビスランドの東洋への興味を掻き

立てたのはニューオーリンズ時代のハーンとの交流であったこと、またそのハーンの手記（その多くは日本時代のもの）を編集したのがビスランドであったことに言及した。ブライとの世界一周競争を通して、ビスランドが得たものは旅行に対する関心の高まりであり、とりわけ極東への思いが高まったと説明した。その後の質問に対して、グッドマンはビスランドが世界一周の途上にあるときハーンが日本に向けて出発した（ハーンの出発は3月なのでビスランドの旅行中ではない）とか、その後のビスランドの日本訪問がハーンとその家族を対象に行われた（ハーンの死後、東京の遺族を訪問した）というような誤りも見られるが、ハーンの果たした役割を評価している点は特記できる。

このように、女性二人の世界一周早回り競争の陰には、多彩な人間ドラマがあった。グッドマンがその著書での記述をひかえたというハーンに関する部分は、ビスランドと関わる部分だけでなく、当時のワールド紙の編集長ジョン・A・コカリルに関するものも含まれていたことだろう。たまたま、今回の競争では、コカリルはブライ側の新聞の編集者であったが、ハーンとの関係からいえば、ビスランドについて全く知らないということはなかったはずである。すでに述べたように、コカリルはシンシナティ・エンクワイアラー紙の記者としてハーンを採用し、またそのハーンを、結婚問題を機に解雇しているからである。しかし、ビスランドもその『人生と書簡』の中で言及するように、後に日本に滞在していたハーンは、日清戦争の取材で来日したコカリルと再会を果たし、旧交を温めた。また、このおり、ハーンは、東京在住の言語学者で日本研究の先駆者でもあるバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）に、コカリルを紹介する労を取っていたのである<sup>(11)</sup>。コカリルの方も、ハーンの才能を評価する記事を『カレント・リタラチャー』（*Current Literature*, 1896年6月号）に書いており、この記事は後にビスランドに次いでハーン伝（*Concerning Lafcadio Hearn*, 1908）を出したジョージ・M・グールド（George M. Gould, 1848-1922）が、その著書の中で、採録しているほどである<sup>(12)</sup>。これらを見ても、コカリルとハーンは喧嘩別れで

はなく、互いにその存在を評価していたことが明らかとなる。偶然のなすところであるにせよ、ハーンと関わるコカリルやビスランドがニューヨークに出てきており、世界一周という一大イベントを通して、間接的ながら接触していた。さらにこの関係が、ハーンが来日した後まで続いていたことを考えると感慨深い。この時代はジャーナリストが新聞社や雑誌社を転々としており、またその新聞社や雑誌社も統廃合を繰り返すと同時に、所有者の交代で編集方針の変更を余儀なくされた。19世紀末は、マスコミ界にとっても激動の時代であり、そのような混乱の中で、プライやビスランドをはじめ、彼らの後ろ盾となった、コカリルやウォーカー、そしてハーンなどが逞しく生きていたのであった。

プライとビスランドの世界早回り競争は、産業の発展とともに交通機関が拡充され、国と国との往来が便利になった19世紀後半ならではの一大イベントであったことは、すでに述べたとおりである。その結果、定着しつつあった旅行ブームに拍車をかけることになったのである。とくに女性の一人旅が安全にできること、そのうえ時間的にも80日を切ることが可能なことなど、その身をもって証明したことにより、さらに多くの欧米人を、アジアやその他の未踏の地域にもたらしことになった。知名度が上がることの功罪があるものの、それらの地域の紹介が進むことで、さらに多くの欧米人を引き付けることになったことも否めない。それだけに、海外事情の本や雑誌のニーズが高まっていたことが理解されるのである。

## 注

- (1) *The Writings of Lafcadio Hearn* Vol.14. (N.Y.: Houghton Mifflin, 1922) 97-99.  
1889年11月の宛名がない書簡だが、編集者のビスランドが、自分に宛てたハーンの淡い恋心が感じられる手紙であることから宛名を意図的に抜いたものと推察できる。ハーンは、直接会ってアドバイスしたかったという内容以外にも、自分が逃げているのではなく、あなたの方が逃げているというような非難めい

たことも言っている。さらにもどかしさが感じられるような表現で愛を告白している。また、競争については、友人らとともに勝利を願い、あなたに賭けているとも書いている。おそらく、社命ですぐ出立したビスランドは、手紙を帰国してから読んだと思われる。

- (2) Mathew Goodman, *Eighty Days: Nellie Bly and Elizabeth Bisland's History-making Race around the World* (Ballantine, 2013) 38. Homer W. King, *Pulitzer's Prize Editor: A Biography of John A. Cockerill, 1845-96*. (Durham, North Carolina: Duke Univ. Press, 1965) 163.
- (3) *The Writings*, Vol.13. 48-49. ビスランドはハーンの伝記の部分で、ハーンのコカリル評（コカリルは、人使いが恐ろしく荒く、彼自身もモーレツな働きぶり、生まれながらのジャーナリストというにふさわしかった。彼を好きだという人はいなかったが、その実行力については誰もが一目置いていた…）を引用したうえで、ハーンの人を見る目、的確な判断力と冷静な観察眼を高く評価した。また、それゆえ、首にされてもハーンはコカリルを逆恨みするようなことはなく、後に日本で円満な再会を果たすことができたとする。コカリルとハーンの関係についてはコカリルの伝記参照。Homer W. King, *Pulitzer's Prize Editor: A Biography of John A. Cockerill, 1845-96*. (Durham, North Carolina: Duke Univ. Press, 1965) 66-69, 266.
- (4) John Brisben Walker (1847-1931). 「ルネサンス的な人」と称されるほどのアイデアマンだった人物。編集者だけでなく、実業家として、農業栽培、公園建設、エリア開発、音楽会の誘致など、主にコロラド州で活動。女性記者の世界早回り競争当時（1889）は雑誌『コスモポリタン』を所有。後にハースト社に売却した。  
“Historic Morrison” (All about history from Morrison, Colorado, USA) <http://morrisonhistory.wordpress.com/people/john-brisbenwalker/16/10/2017>  
また、1875年から77年にかけてハーンが記

者を務めた『シンシナティ・コマーシャル』紙が1883年に『シンシナティ・コマーシャル・ガゼット』となった時には編集長を3年ほどやっている。

- (5) Nina Brown Baker, *Nellie Bly, Reporter* (Scholastic, 1972) 90-92.
- (6) “Society Topics of the Week,” *The New York Times*, November 24, 1889.
- (7) Elizabeth Bisland, *Seven Stages: A Flying Trip around the World* (N.Y.: Harper & Brothers, 1891) 54-55.
- (8) Bisland, 53.
- (9) Nellie Bly, *Around the World in Seventy-two Days* (N.Y.: Pictorial Weeklies Company, 1890) Chap.14 “To the Land of Mikado”
- (10) Adventure Travel Writer (2014年3月20日付) “Race Around the World in 1889: Nellie Bly and Elizabeth Bisland” と題する『80日間』の作者マシュー・グッドマンに対してインタビューした記事。(http://adventuretravelwriter.org/2014/3/20/race-around-the-world-in-1889-nellie-bly...)
- (11) Ed. Kazuo Koizumi, *More Letters from Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn and Letters from M. Toyama, Y. Tsubouchi and Others* (『ヘルンに宛てたチェンバレン教授, 外山博士, 坪内博士の手紙』) (Hokuseido, 1936) 160-61.
- (12) George M. Gould, *Concerning Lafcadio Hearn* (Unwin, 1908) 15-16.